

災害や飢饉、内戦など、世界には目を覆うような悲惨な状況の中で生きる人々がいる。一方、そうした人々に手を差し伸べる人もいる。キリスト教を基盤に世界各国で飢饉、貧困の撲滅に取り組む日本国際飢餓対策機構（JIFH）の常務理事清家弘久さんと、おいしい備蓄食品「パンの缶詰」で注目を集める、株式会社パン・アキモト代表取締役社長の秋元義彦さんに、援助活動への思い、実際の支援現場などについてうかがった。

パン職人の矜持として
食べものを生かす
仕組みを作る

秋元さんは、東日本大震災では、「パンの缶詰」をはじめ大量に食糧を援助し、1年以上たった今でも、被災地で定期的にドーナツや揚げパン、屋台の炊き出しを行っています。一方、国際的な援助団体として長年の実績がある日本国際飢餓対策機構（以下 JIFH）独自の支援活動を行いながらも、タッグを組むことも多いそうですね。

秋元 我が社の社会事業の一つに「救世鳥プロジェクト」があるので

うしかありませんでした。備蓄期間に大きな災害がなかったことは喜ぶべきだけれど、「人を助ける食べものをつくったはずなのに、ゴミを増やしたのか」と思うと、本当に悔しかったです。

その後、2004年にスマトラ島沖大地震が起き、スリランカにいる友人から「すぐにパンの缶詰を送ってくれ！ 中古でもいいから」とヘルプの要請が来たのです。このときは、新品を送ったのですが「中古」という言葉がひっかかり、考えているうちにひらめきました。3年間ある賞味期限を生かして、購入者が2年間は緊急時食糧として備蓄し、その後は緊急支援用に提供することで飢餓対策に参加する、いわば「保険プログラム」にすればいい！ そこで、以前からつながりのあった清家さんに相談したのです。清家 援助物資をいただくだけでなく、僕たちは、フィードバックできる間柄、つまり本当に協働することが大切だと思っています。秋元さんとの取り組みであれば、例えば、当初、パンの缶詰の大きさは1種類しかなくて、現地では、その空き缶をコップとして使っていました。「現

パン・アキモト
秋元義彦

株式会社パン・アキモト代表取締役なんでも係
救世鳥プロジェクト本部長
NPO 法人 We Can 事務局長



すが、これは、JIFHさんとの連携なしには成り立たせません。プロジェクトの仕組みは、3年間の賞味期限がある「パンの缶詰」を自治体や学校、個人の方に購入していただ

き、2年間で過ぎたところでアキモトが下取りし、JIFHさんを通して国内の災害地や海外の飢餓地域に緊急援助物資として送るといふもの。私たちには「パンの缶詰」と

震災1年
対談

災害支援は
つながりから

クリスマスチャン企業、
クリスマスチャン NGO
の働きを聞く

地では食器が不足しているから、缶は大きい方がいい」とお伝えしたら、「救世鳥プロジェクト」の缶は2倍の大きさになりました。

秋元 そうこうするうちに、「JIFH ハンガリー特別大使」に任命していただきました（笑）。清家さんと一緒に世界の被災地や飢餓地帯を回り——あ、もちろん自費で

一般社団法人
日本国際飢餓対策機構 常務理事
清家弘久
日本国際飢餓対策機構



いう賞味期限の長い、おいしい備蓄食糧がある一方で、JIFHさんには、どこで食糧が必要とされているかといった情報と配布ルートがあります。これを組み合わせなければなりません。私たちがJIFHは、「ハンガリー」を合言葉にしていますから、しばしば「食糧を支援したい」というお声掛けをいただきます。しかし、輸送と税関通過にかかる時間と賞味期限の問題、コンテナ一つ分の量が集まるのか、さらに100万円単位の送料の問題があります。その点、秋元さんは、最初から「送料はアキモトで負担します」と明快でした。秋元 根底には、パン職人としての自責の念があるんですよ。「パンの缶詰」は、阪神・淡路大震災の後、「備蓄できるパンを作りたい」と思い、試行錯誤して開発しました。カンパンなどと違ってお年寄りや小さな子どもでも食べやすいと好評で、自治体や学校などが備蓄品として購入。そして、賞味期限の3年が過ぎたとき、「引きとって欲しい」との依頼が来しました。実は、賞味期限が過ぎた食品は産業廃棄物。産廃の移送には特別の免許が必要で、「そちらでゴミとして処分してください」とい

ね（笑）——、実際に自分でパンを手渡すこともさせてもらっています。現地で見聞したことを書いてたり、講演したりする機会もいただいています。これらの活動は、JIFHの方のウェブサイトで見てもらうようにしています。

清家 企業を率いる多忙な身でありながら、「今度アフリカに一緒に行きませんか？」と誘うと二つ返事で「ハイ！」って。行動力が尋常じゃない（笑）。

秋元 海外の困っている人に何か返したいというのは、私のオヤジの信念でもあったんですよ。戦前から、民間航空に勤めていたオヤジは、戦時中民間とはいえ軍に加担してしまったことを後悔し、戦後は航空業界とは縁を切ってパン屋になりました。将来アジアでもパン職人を育てたいという夢があり、実際、パン屋としてある程度成功した後、アジアから研修生を招こうと奔走したけど、そのときは研修生ビザの制度がなくて叶わなかった。パンの缶詰で国際貢献をするのは、オヤジから引き継いだ夢を実現することでもあるのです。

支援団体が去つても
教会は残る

だから、教会を通して働く

―被災地などで活動するとき、キリスト教精神に基づく活動であることをアピールすべきか、それともしないほうがいいのか、実際に活動されてどうお考えになりますか？

秋元 私たちは「クリスチャン企業です」などの宣伝はまったくなし！
私自身、「クリスチャンだから」ではなく、「パン屋のできること」

をしているだけ。東日本大震災に際しては、現在も定期的に炊き出しを行っていますが、もちろん、社員の参加はボランティア、つまり希望者だけ。でも実際には、パンを受け取ってもらえることがうれしいから、ほとんどの社員が1回は参加しています。社員たちはもちろん、私や常務である家内がクリスチャンであることは知っていますが、キリスト教うんぬんよりも、「秋元はそういう人間だから」と受けとめていると思います。
被災された皆さんは、震災直後から我慢強くて、遠慮深くて、なかなか

か受け取ってくれない。そんなときは「今度、オレたちが困ったとき助けてくれ」と言えるように、今、これを受け取つてよ」と渡します。被災者と支援者ではなく、お互いに「助けて」と言い合える人間関係をつくるのが大事だと思いますよ。
清家 キリストの名の下に働いていることは全然隠す必要はありません。秋元さんのように被災地で働いているクリスチャンは、牧師も含めて、皆さんまず「働きありき」。本当に献身的で頭が下がりますよ。もしも、自分の組織の宣伝、拡大をしようなんて思いが先立てば、それは必ず被災者に伝わりません。活動も長続きしません。

JIFHに関していえば、海外でも国内でも、私たちが単独でコミュニケーションに関わることはなく、必ず、現地の教会を通して、クリスチャンコミュニティとともに働きます。なぜなら、私たちの支援が終了しても教会はその地域に残るから。「JIFHが何かしてくれた」のではなく、「あの教会の人たちが、牧師さんが助けてくれた」ということが大切。

そのためには、家庭、教会、それから地域のリーダーたちといった3



つの層をターゲットに働きかけをします。私たちはそれを「ビジョン・オブ・コミュニティ」と呼びます。

それぞれの人たちが神様と出会って変わっていくことが私たちのビジョン。住民の中から「自分は地域に何ができるか」を考えて行動し始める人が育てば、地域としての自立につながり、私たち支援団体が引き揚げた後も、社会はしっかりと動いていきます。

―それは、海外の「どの町にも教会

がある」状況なら可能と思えますが、日本では難しいのでは？

清家 そんなことはないですよ。例えば、震災以前、宮城県南三陸町にはキリスト教会がありませんでした。が、基督聖協団西仙台教会の中澤竜生先生が、「私はキリスト教の牧師です」といって、毎日仙台から避難所に通い、モノを届けるだけでなく、声をかけて、悩みを聞いて信頼関係を築き、人々、中でも地域のリーダーになるべき人々を励まし続けました。

震災1年対談
バン・アキモト 秋元義彦 × 日本国際伝道員会 清家弘久

そうした真摯な働きから、若いリーダーたちが生まれ、また、人々の集う場として、「クリスチャンセンター『愛・信望館』」が求められて完成し、今年の6月10日には初めて礼拝が持たれました。牧師として有機的な場づくりをされている中澤先生を、私たちJIFHやサマリタンパースなどのNGOが建物や設備を贈ることサポートしています。つまり、教会が地域に根付いていくように下支えしているのです。教会同士がネットワークして、教会のない地域にも手を差し伸べたから、私たちは教会を助けることで、地域をサポートすることができたのです。南三陸だけでなく、宮城県南部の亘理町にも同じように教会ができ、また女川でも動きがあります。教会を通して働く力には、素晴らしいものがあります！

秋元 震災発生直後は、食糧を提供したくとも、自衛隊を通して届けるぐらいしかできませんでした。でも、NGOや教会の動き出しは早かった。JIFHさんはすぐに仙台市内に倉庫を確保し、全国から集まった物資を受け入れ、現地の教会を通して地域に援助物資として配布しました。

私たちは自分たちでも配つたけれど、JIFHルートでも食糧支援をさせていただいた。配布先とか、現地の状況などフィードバックをもらえるから、こちらもやりがいを感じましたね。

日本の教会には
社会に貢献する力がある！

―昨年取材で仙台にうかがったとき、ある教会の牧師さんが「教会から支援物資を配布することで、働きが与えられ、教員も勇気づけられた」とおっしゃっていました。

清家 そうなんです。今回の東日本大震災だけを切り取っても、日本のキリスト教界の働いてスゴイと思いますよ。例えば、仏教系の団体が被災自治体に5億円送った、神道系のある教団は4億円などの広報活動が盛んです。もちろん、支援は金額だけで表されるものではありません。でも、人口の1%以下でありながら日本のクリスチャン、教会の働きを全部まとめれば、その何十倍にもなるでしょう。さらに世界中からクリスチャンネットワークによってボラ

ンティアが来日し、献金も届けられています。「右手のすることを左手に教えるな」とあるように、教会は「いいことをやっていますよ」となかなか言えない。救援の規模を教派、教団では把握していても、キリスト教界全体ではわからないから、「日本の教会ってたいしたことない」と思うのでしょうか。でも、教会を通して社会に貢献するというのは、阪神・淡路大震災のときにもありましたし、最近では、ホームレスの自立、自殺志願者の救済など、コミュニティの問題に関わる教会の働きが知られ、テレビ番組などでも報道されています。日本の教会は、力がありますよ！

2011年の東アフリカ大飢饉では緊急援助を実施

—おふたりは海外での支援にも出かけられています。2011年は、ソマリア、エチオピア、ケニア、ジブチなど東部アフリカで大飢饉が発生しました。9月に現地で緊急援助を行ったそうですね。

—その力を発揮するには、何から始めればよいでしょうか？

清家 直接関われなくても、現地ではそれぞれの働きが継続しています。まずは、自分が出会った人や地域を折りの課題として覚えること。寄り添い、隣人になっていく。それこそが、クリスチャンの視点であり、私たちにできる最大のことだと思います。もしも、具体的な相手が思い浮かばなければ、出かけてみましょう。

世界のつながりを意識しつつ身近なコミュニティとつながる

—アフリカの飢饉のニュースは、震災後の混乱の中で聞きました。個人的には、目の前の混乱に気をとられて海外への関心、支援は二の次になりがちです。広い視野を保ち、活動を持続するコツはなんですか？

清家 震災後、ハッとすることがあります。「清家さん、F.H.さんは震災の方でいい働きしているけど、忘れたらあかんぞ。いまも、世界では1日に2万人以上が飢えて死んでんのやろ？」と言われて。主たる働きを忘れてはいけないと思わされました。実は、被災地の倉庫の入り口にパソコンを置いて、飢餓地帯の映像を流しています。被災者の方々はそれを見て、「世界にはもっと大変なところがあるんだ。こんなんで、弱音吐いちやだめだね」とか、「気持ちだけでも届けたいね」と言います。日本の被災地と東アフリカがつながるんですよ。

秋元 私たちが支援を続けられるのは、誰も無理をしないシステムを作ったからだと思います。パン屋としてしっかり事業を継続しなければ、支援活動もできません。よく、「ソーシャルビジネスの理想形」などとお褒めいただきますが、企業はそもそもソーシャルな存在。「利益のうち5%」などと割合を定め、それを社会に還元すればいいのです。パン・アキモトの場合は、利益の一定の割合を、見返りを求めない事業に費やすことにしています。しかも、それを本業の中に置く。そして本業全体をがんばる。だから、震災支援もするし、呼ばればアフリカにも行きます。

震災1年対談
パン・アキモト 秋元義彦 × 日本国際義援会 清家弘久



分て手渡したい。昨年は、清家さんと一緒にケニアから入って、エチオピアの国境近くのマルサビットというところまで行きました。緊急の食糧援助が目的でしたが、ハンガーゼロ特別大使として、何が必要なのか、食糧か、教育か、医療かなどを見極める役目もありました。実際、飢餓は本当に厳しい状態で……。栄養失調の子どもの中には、国連などが配っているビーナツベーストの栄養食さえ飲み込めない子もいる。そういう命の瀬戸際にある子に、缶詰から出したパンを渡したら、口にしたとたん目の輝きが戻ったのです。あの子が生き延びられるかどうかはわ

からない。パンは彼らの常食ではありませんから、1食以上与えられるものでもありません。でも、おいしいものがこの世にあるということが希望になれば……と思うのです。

—清家さんは、今回、国連の難民キャンプでも活動されたと聞きました。

清家 はい。途中で秋元さんと分かれてソマリアの国境近くにあるダーブの国連難民キャンプへ向かいました。ここは、収容人数9万人を想定したキャンプですが、僕たちが着いたときには難民は44万人を超えていました。実は、国連が展開している難民キャンプには、国際NGOといえども、実績のある大手しか支援に入れません。私たちF.H.は、かねてから現地での調理に使うエコストーブの効率的な使い方を指導していて、その活動が認められて今回初めて難民キャンプに入り、同様の支援をしてきました。キャンプの難民と地元住民との間の、燃料(薪)の取り合いによる摩擦を少しでも解決しようという試みです。

とき、私たちが痛むのです。

—今は、いつ、どこで大地震が起こってもおかしくない時代です。大規模災害に備えて、教会は、何をどんなふう

秋元 教会に限らず、誰でも自分の本業から支援できる例を一つお伝えしましょう。「救世軍プロジェクト」を立ち上げたことを知った同級生が、「うらやましい。お前、パン屋だからできるんだよね」と言いました。彼は寝具の製造おびり業の会社の社長。そこで、一緒に考えました。償却期間の終わったリース用の布団や毛布を捨てないで洗濯殺

菌し、日本各地に倉庫を借りて備蓄しておく。備蓄品は寝具に加えてパンの缶詰と水。どこかで災害が起れば、近くの倉庫からその備蓄品をすぐに避難所に届ける、というシステムです。「災害支援機構 We Can」というNPO法人として立ちあげたところ、さまざまな企業や個人が賛同してくれました。本気になれば、アイデアは出るものです。

清家 教会の備えとしては、地域とつながっておくことです。ご近所の方々、行政、学校、福祉施設、警察、企業……助けを出すにしても、受けるにしても、さまざまなネットワークがあることが役立ちます。例えば、地元のスーパが物資を集め、教会がボランティアを募って被災地の教会に運び、受ける側の教会も地域のネットワークを使って物資を有効に配布することができそうです。これこそ、「出て行って、すべての人を弟子にしなさい」という聖書の教えの実践。つまり、地域に奉仕して、地域を変える力になりなさい、ということ。教会はそれができるのです。

2012年4月6日 宮城県南三陸町にて/追加取材6月15日 東京都内にて(取材、撮影、構成・栗山のぞみ)